

戯曲「最後の武器」にみる安部公房の翻案態度 ——加藤衛「世界に警告する」との比較から——

佐々木 幸 喜

一 はじめに

昭和三十三年八月、第四回原水爆禁止世界大会が東京において開かれた。その最終日、宣言発表大会の第二部の催しとして、安部公房の脚本による合唱劇「最後の武器」(演出・千田是也、音楽・林光)が上演された。副題に「ヴァイゼンボルン作」「ゲッチンゲン・カンタータ」にもとづく改作」と掲げる通り、本作は、劇作家ギュンター・ヴァイゼンボルン⁽¹⁾の"Göttinger Kantate"⁽²⁾を下敷きとした戯曲であり、それと同時に、安部が初めて手がけた翻案劇でもあった。高橋信良は、原作"Göttinger Kantate"に着目し、両作の比較を行っている。高橋は「最後の武器」という表題が「文字どおり核爆弾を指」すことを挙げ、「支配者」としては、戦争終結のための必要悪、民衆にとっては、人類滅亡の意味を孕んでいる「点を指摘した上で、原作との共通点・相違点を示す。「武器の歴史を語り、日本に二度投下された原爆の悲惨さを訴える点」では共通するが、「科白やシュプレヒコールの構成と内容」は、「安部独自のものとなっている」とする⁽³⁾。た

だし、果たして安部は原作に拠ったのであろうか。本稿では、まず第四回原水爆禁止世界大会での劇の脚本担当が、ヴァイゼンボルンが日本語訳を依頼した加藤衛ではなく、安部となった経緯を考える。その上で、安部が翻案を行った際に、原作の"Göttinger Kantate"よりもむしろ、加藤衛による「世界に警告する シュプレヒコール——ゲッティンゲン・カンタータ——」を下敷きにした可能性を指摘し、また、加藤訳との相違点からどのような意図を作品に込めたのかを検証する。

昭和三十年代前半、安部はどういった人々と関係していたか、本稿は、加藤訳と安部翻案の比較を行う中で、上演されるはずであったものの〈と〉上演されたもの〈と〉の狭間に何があったかを探るものである。

二 「最後の武器」 上演の背景

二二一 第四回原水爆禁止世界大会

「最後の武器」は、昭和三十三年八月二十日、第四回原水爆禁止世界大会のフィナーレ第二部の合唱劇として上演された（於 日比谷野外音楽堂）。上演に際し岸旗江（語り手）、関忠亮（独唱）他、「俳優座、民芸、青年座、三期会」と「中央合唱団」など二百名近くが出演している⁽⁴⁾。本節では、この原水爆禁止世界大会の設立経緯について概観しておきたい。

昭和二十九年三月一日、漁船・第五福竜丸の乗組員二十三名が太平洋のビキニ環礁において、アメリカの水爆実験によって生じた「死の灰」を浴びて被曝した。この事件が、同年三月十六日付の『読売新聞』⁽⁵⁾で大々的に報じられた後、日本「各地で自発的な核兵器禁止の署名運動」が起り、「全国組織「原水爆署名運動全国協議会」へと発展」、昭和二十九年八月「広島で初の原水爆禁止世界大会が開かれる」⁽⁶⁾こととなった。「民衆運動が、戦後初めて開催する国際集会」として注目されたこの大会は成功を収め、「新たな運動の可能性を参加者たちの前に明らかにし」⁽⁷⁾た。その後順調に回を重ねていった世界大会は、昭和三十三年に第四回大会として東京で開催されるに至った。大会には、日本「各地から約四六〇〇名の代表」と第四日目からは「国際会議に出席する三九カ国、一国際団体の海外代表一二一名が参加し」⁽⁸⁾たという。日本大会では「日本の核武装阻止」と民主主義の擁護」が中心に据えられ、六つの課題「(1) 原水爆実

験の即時全面禁止、原水爆禁止と軍備縮小、(2) 日本の核武装禁止
 (3) 核戦争準備と国民生活、(4) 放射能害とその対策、(5) 原水
 爆被害の実相と被爆者救援、(6) 原水爆禁止運動と平和運動」⁽⁹⁾
 について討議が行われた。続けて開かれた「第四回世界大会国際会議」
 では、「世界大会宣言」の提起とともに、「人類は原爆死か、全人類の
 利益のためにその創造力を用いるかの分岐点に立っている」とした上
 で、「いかなる情勢のもとでも核兵器を使用しないという誓約」や「非
 核武装地帯の設置」⁽¹⁰⁾などの要求が提出された。

藤原修の言葉を借りれば、原水禁運動は、「日本の大衆運動の中でもまれに見るほど強固な持続性と大衆的アピールを獲得し」¹⁾たものとして機能していたようである。第四回原水爆禁止世界大会最終日の様子を報じた新聞記事として、例えば「二万人のチョウチン行列原水爆禁止世界大会の閉幕飾る」(昭和三十三年八月二十一日付『読売新聞』朝刊十四版七面)には、「労組員や一般大衆」一万人強の人々がフィナーレに参加していたと記録されている。

九日間にわたってくりひろげられた第四回原水爆禁止世界大会の
 フィナーレは二十日午後五時半から日比谷野外音楽堂に都内各地
 からかけつけた労組員や一般大衆一万二千人によつて盛大に行わ
 れた。／大会は第一部宣言発表、第二部は合唱、合唱劇で二時間
 にわたつて平和への願いが訴えられた。／〔略〕／アピール要旨
 国際緊張が高まり戦争の危険が拡大した情勢下で行われた世界大
 会は次のことを訴える。／①核実験の即時、無条件停止、これは
 米英がソ連の例にならえば実現されるだろう。／②米英両国軍隊

はレバノン、ヨルダンから即時撤退すること。／③国際緊張を緩和するため首脳会談を行うこと。／④いかなる情勢の下においても原子兵器を使用しないという制約がすべての政府によってなされること。

それでは、当時の安部が核や原水爆に対してどのような考えを抱いていたか。次節では、そのことについて確認していきたい。

二―二 原水爆に対する安部の姿勢

原子力に対して、戦後、「侵略の核」と「平和の核」の二極に揺れていた日本の世論は、昭和二十九年の第五福竜丸事件を機に、その流れを〈原水爆禁止〉の希求へと向けることになった¹²。安部の原子力に対する発言としては、ビキニ水爆実験に関する反応がその最初のものであるが、そこには否定的な態度が見て取れる。例えば、「人間の心をおそう死の灰」（昭和二十九年六月『文学の友』）には、ビキニにはじまるアメリカの「水爆実験」を、「民衆の集団的慢性自殺をねらった、心理戦争」だとみなす安部の態度が確認できる。

ふと私は「慢性自殺」という言葉があつたのを思い出していた。「慢性自殺」とは、生きる希望を失い、生きるための精神の運動を停止して、ゆっくり徐々に死への道をたどることである。／〔略〕

／水爆は、単に家や工場や人間の肉体を破壊させるだけでなく、人間の心を亡ぼしてしまう、心理兵器でもあつたわけだ。大きな不安は、人に抵抗の心をあたえる。／〔略〕／マグロ船をおそった死の灰のほかに、人間の心をおそう死の灰がある。その死の灰

は、健康な人間を慢性自殺者に変えてしまう。慢性自殺者は〔略〕戦争屋のための、M S A [Mutual Security Act の略で「日本国とアメリカ合衆国との間の相互防衛援助協定」の意。昭和二十九年三月に東京で署名された]のための、都合のいい人的資源である。アメリカのたび重なる水爆実験は、ただ水爆製造業者のフトコロを肥やすだけでなく、たしかに民衆の集団的慢性自殺をねらった、心理戦争だと私は考える。／〔略〕／日本に軍隊をつくりたがっているアメリカは、日本に慢性自殺者がふえることをのぞんでいる。心理的な死の灰が日本全土にふりそそいで、日本人全体が集団慢性自殺をすることを待ちのぞんでいる。水爆実験は、単なる実験ではないのだ。それはすでに現実的な民衆に対する挑戦なのである。／〔略〕／死の灰にうちかつ魂の武器……それはただ団結である。全世界にひろがる平和の団結と腕をくむことである。

〔太字は原文ママ〕

また次の引用では、原水爆禁止決議案の発端となった、イギリスのクリスマス島の水爆実験についての発言が確認できる¹³。この中で、安部は「クリスマス島の水爆実験」への反対を「直接政治的働きかけのための戦術として意識的に運用」しなければならぬと言う。

クリスマス島の水爆実験反対は、ジャーナリズムのうえでも、いままでない活況を呈している。国会の決議まであり、いかにも国をあげての反対のようで、たのもしいかぎりだが、しかし実状は、そう手ばなしで樂觀できたものでもなさそうだ。／〔略〕／原水爆の使用側では、その戦略的使用と戦術的使用とはつきり

区別し、現在ではむしろその戦術的意義を重視しはじめている。ということは、原水爆がいぜんとして戦争の問題に従属し国際政治に従属していることにほかならぬ。クリスマス島の実験反対も、実験の全面的即時中止と、そのための、民衆への心理的・道德的ではない、直接政治的働きかけのための戦術として意識的に運用されるのでなければ、いたずらにヒステリックな幻想と、それにづく絶望と不信の念をうえつけるにとどまるだろう。

この発言によると、安部は、「原水爆の使用者」たちが「原水爆」に「その戦術的意義」を見出した背景には、「原水爆」が「戦争の問題」や「国際政治に従属し」たものであるという考えが旧態依然として残っているためであり、その打開には、「クリスマス島の実験反対」運動を「政治的働きかけのための戦術」として用いることが肝要であると考えていたようである。また、両方の引用文に共通することとして、「原水爆」を、日本に照準を合わせた問題として捉えている点が挙げられるだろう。

二―三 Günther Weisenborn "Göttinger Kantate" と加藤衛「世界に警告する」

"Göttinger Kantate" の日本初訳は、劇作家・加藤衛（大正三年〜平成四年）によってであった。加藤は、「昭和・平成期の演劇学者、演出家」¹⁴として、横浜演劇研究所を設立（昭和二十七年）した人物であり、「世界に警告する」以前にも、ヴァイゼンボルン作品を翻訳していた¹⁵。加藤に翻訳を直接依頼している経緯を、次の引用文に

確認してみよう。

作者ギュンター・ヴァイゼンボルン氏（一九〇二年）は、現ドイツ劇界にあつて第一線に活躍中の劇作家ですが、戦時中の対ナチ抵抗運動の闘士としても、その著「炎と果実」「声なき蜂起」（岩波書店刊）によつてすでにわが国にその名は知られております。

／（略）／氏がこの作品の原稿を直接訳者に送られ、今夏の第四回世界平和大会でのその上演を期待しておられるのも、氏の著しい日本への関心、原水爆禁止運動への熱意のあらわれにほかなりません。訳者は早速原水爆禁止日本協議会に連絡をとり、千田是也さんを中心に、各劇団の御協力を待て第四回世界平和大会での上演を、実現したいものと考えております。

「世界に警告する」訳者のことば（昭和三十三年九月『悲劇喜劇』第十二巻第九号）

「作品の原稿」が加藤の手元に届いた正確な日付は明らかではないが、「世界に警告する」上演に参加した劇団〈麦の会〉の記録には、「七月の中旬、横浜演劇研究所の加藤さんの突然の来訪を受けた」¹⁶とあるため、昭和三十三年七月以前であったと推測される。加藤はヴァイゼンボルンが第四回原水爆禁止世界大会での上演を望んでいるという意を汲み、千田是也に連絡したと言う。加藤と千田との関わりは、加藤の述懐によると、千田の主宰した「俳優座」（昭和十九年二月結成）に「入座した」「昭和二十一年」¹⁷に始まるようである。加藤は「経済的理由から」、俳優座を「わずか半年足らずで退座した」が、「俳優座を招いて、横須賀地区の生徒たちに、新劇鑑賞の機会を用意」するな

ど、「演劇に密着していった」(同)ことを回想する。「新劇鑑賞会」は「経営的には失敗した」が、その後も千田との交流は続き、千田は加藤の著書『演劇の本質』(昭和二十三年十二月、白鷺書房)に「序文」を寄稿、「横浜演劇研究所の月刊機関紙『よこはま演劇』の題字や横浜演劇研究所第一回講演会の講師」依頼も「ころよく引き受け」たという。第四回原水爆禁止世界大会における上演の協力要請もこの人間関係の中で行われたものと推測される。

加藤の働きかけの後、第四回原水爆禁止世界大会における劇が、安部脚本によって上演されることが決定した⁽¹⁸⁾。その記事が、『よこはま演劇』⁽¹⁹⁾に確認できる。

原水爆製造、実験へのはげしい怒りをぶちまけ、世界の良心に訴えかける、この作品の異常なまでの力は、わたしの心をゆさぶらないわけにはいかなかった。／東京の第四回世界平和大会⁽²⁰⁾での上演を希望する、作者ヴァイゼンボルン氏の期待にこたえて、わたしは、早速、原水爆禁止日本協議会に連絡をとり、千田是也氏に、その上演をお願いした。八月二十日日比谷野外音楽堂の報告大会に、千田是也氏演出、安部公房氏脚色劇団協議会参加により、その上演が決定したことは、うれしいことだ。

「もうこれ以上がまんはできない　―「世界に警告する」上演に当って」

脚本の執筆担当が加藤ではなく安部になった経緯について、安部本人の発言が確認できないため、推測の域を出ないが、その背景にはいくつかの要因があったものと考えられる。

第一に、安部と千田の結びつきである。第四回原水爆禁止世界大会の二か月前にあたる昭和三十三年「六月二十三日」から一か月前の「七月二十二日」⁽²⁰⁾にかけて、安部の戯曲「幽霊はここにいます」が「俳優座劇場」において上演されているが、その演出を担当したのが千田であり、「幽霊はここにいます」に続けて「最後の武器」の稽古が行いやすかったということもあるかもしれない。そもそも、安部と千田が演劇で関わりを持つようになったのは、昭和三十年六月十七日から七月十日にかけて上演された「どれい狩り」を千田が演出及び衣裳を担当したことがきっかけであった。安部は昭和三十年六月、麻布公会堂で開催された俳優座主催の「現代演劇と文学を語る夕べ」において尾崎宏次、千田是也らと講演を行っており、その速記録が『安部公房全集005』(平成九年十二月、新潮社)に収められている⁽²¹⁾。ここには、安部に対する俳優座の協力があって、「どれい狩り」を書き上げたことが語られている。

私などのように全く経験のない者に、俳優座の方々が非常に積極的に言われて、去年の中頃、色々具体的に書くための条件を作つて下さったので、それじゃ一つ本気で芝居を書いてみようという覚悟をして、そうしている内に「制服」というのを去年の暮、群像から短い小説を頼まれて、あるテーマで書きはじめていたのですが、それがどうしても書けなくて、メ切りの土壇場まで来て、明日絶対に取りに来るというので、困ったと思っていた時に、もしこれを芝居で書いたらという気持がしたので、六十枚書いたのが「制服」です。／〔略〕／あれが一つの誘い水みたいになって、

それから本気で「どれい狩り」の仕事にかかったのです。

一方、「どれい狩り」の演出と衣裳を担当した千田は、安部との仕事について次のように話す⁽²²⁾。

『どれい狩り』の仕事は、近頃とてもおもしろかった。おもしろかった原因は、この戯曲や作者と大変うまがあったからだと思う。ものの考え方にもそう狂いはなかった。洒落っ気も茶目っ気も相通ずるところがあった。余り遠慮しあったり、いたわりあったりの必要もなく、ざっくばらんに協同作業がうまく弾み、もちつまたれつ順調に盛りあがってゆくような気がした。おまけに二人で稽古場や客席に坐って、肘をつつきあいながら、ゲラゲラ笑うことなどもできた。

安部よりも二十歳年上だった千田にとって、「どれい狩り」は「協同作業がうまく弾む」とてもおもしろい仕事となったようである。相手に対する好感を持っていたのは安部も同じだったようで、石原慎太郎との対談⁽²³⁾の中で、「演出家をどこまで信用するか」という話題に触れた際、次のように話す。

作家側としては、演出家をどこまで信用するかという問題なんだな。僕も、これはあまり大きな声では言いにくいんだが、芝居だと結局、千田是也にならやってももらいたいという気になっちゃうんだ。いまのところほかの人だとちょっと具合が悪い。

また、第二の要因として、世界大会での上演時期に合わせ、出演者数を増やす必要があったとも考えられる。前掲『よこはま演劇』（第四十八号）によれば、「世界に警告する」の出演者が、加藤衛が拠点

を置く「横浜演劇研究所」や彼に協力を要請された〈麦の会〉をはじめとする劇団員二十五名と「その他 電通ともしび・東芝演劇部」であったのに対し、「最後の武器」の出演者総数が二百名であったことを比べても明らかであろう⁽²⁴⁾。地域の市民演劇に根ざした活動を行っていた加藤にとっては、横浜における「成立、歴史を異にする劇団の合同上演」⁽²⁵⁾を成し遂げることが重きを置くことだったのかもしれない。

次章からは、加藤の後を受けた安部が「最後の武器」を執筆する際に、原作に拠るのではなく、加藤訳を下敷きにした可能性について考えていきたい。

三 加藤衛「世界に警告する」から安部公房「最後の武器」へ

三― 配役と構成

まずは、“Göttinger Kantate”「世界に警告する」及び「最後の武器」の配役と構成について確認しておこう。それぞれの配役については、表一にまとめた。なお、“Göttinger Kantate”の表題には稿者による拙訳を施し、□に入れて示した。

表一 三作の配役

"Göttinger Kantate"	「世界に警告する」	「最後の武器」
Der Berichtler [報告する人]	報告する人	語り手
Der Instruktor [教える人]	教えてくれる人	民衆1、2、その他
Die Hersteller 1,2,3 [製作者1,2,3]	「原水爆をつくる人」1・2・3	支配者1、2、3
Die Handhaber 1,2,3 [扱う人1,2,3]	「原水爆を使用する人」1・2・3	科学者1、2、3
Sprecher, Solisten und Chor [話し手、独唱者、合唱団]	民衆（語り手、独唱者、合唱者）	紳士1、2
		兵士たちとその指揮官
		棍棒をもった男
		槍と刀をもった男
		鉄砲をもった男
		被爆者1、2、その他（ただし、被爆者は、民衆の一部であり、セイ然と区別してしまう必要はない）

加藤訳「世界に警告する」（以下「加藤版」）の配役が、Weisenborn 作 "Göttinger Kantate"（以下「原作」）のそれをほぼ踏襲しているのに対して、安部翻案「最後の武器」（以下「安部版」）の配役が原作や加藤版よりも増やされ、また、それぞれの属性も細分化されていることがわかる。次に、三作の構成を確認してみよう。表二である。なお、加藤版の章番号4・7・8・11・16、安部版の章番号9に〔無題〕とあるのは、稿者が便宜的に付したものである。

表二 三作の章構成

原作	加藤版	安部版
1 Introitus 〔導入〕	1 プロローグ	1 プロローグ
2 Die Geschichte der Waffe 〔武器の歴史〕	2 武器の歴史	2 武器の歴史
3 Die Handhaber 〔扱う人〕	3 原水爆を使用する人たちと原水爆をつくる人たち	3 最後の武器
4 Die Hersteller 〔作る人〕	4 〔無題〕	4 子供たちの歌
5 Die erste Anwendung 〔最初の使用〕	5 最初の使用	5 被害状況
6 Die Konstellation 〔情勢〕	6 標的	6 ローゼンバーグ
7 Die Vorstellungen 〔抗議〕	7 〔無題〕	7 水爆への道
8 Das Fabelchen vom Interessanten 〔興味深い人のちょっとした寓話〕	8 〔無題〕	8 どちらが無知か？
9 Das Ziel 〔標的〕	9 ゲッティンゲン宣言	9 〔無題〕
10 Die Beruhigung 〔安心せよ宣言〕	10 おだやかな光	
11 Die fehlende Stimme 〔聞こえてくれない声〕	11 〔無題〕	
12 Das Göttinger Manifest 〔ゲッティンゲン宣言〕	12 ビキニの魚のパラード	
13 Die sanfte Strahlung 〔穏やかな放射線〕	13 第三次世界大戦	

14 Die Ballade vom Bikini-Fisch 〔ビキニの魚のバラード〕	14 かつての先生の なつかしい歌	
15 Der dritte Krieg 〔第三の戦争〕	15 ドイツの討論	
16 Das alte Lied vom alten Lehrer Leid 〔年老いたLeid先生の昔の 歌〕	16 〔無題〕	
17 Die deutsche Diskussion 〔ドイツの討論〕	17 抗議	
18 Die Frage 〔質問〕	18 利権屋のちよつとした お話	
19 Die wahre Sicherheit 〔本当の安全性〕	19 要求	
20 Die Große Forderung 〔重要な要求〕	20 理性の賛美歌	
21 Der Choral von der Vernunft 〔理性の賛美歌〕	21 理性の 声	
22 Die Stimme der Vernunft 〔理性の 声〕	22 ファイナレ	
23 Finale 〔フィナーレ〕		

原作が二十三章構成、加藤版が二十二章構成であるのに対して、安部版は九章構成であり、全体的に安部版が短くなっていることがわかる。加藤版においても、原作の二章分（第三章〔扱う人〕、第四章〔作る人〕）を一章に統合（「3 原水爆を使用する人」と原水爆をつく

る人たち」）したり、章の変更（原作では七章にある「抗議」が加藤版では十七章にある）を行っていたりはするが、本文を確認する限りでは、加藤版は基本的には原作をなぞっている。

三―二 本文異同

加藤版と安部版とを比較したとき、両作に共通あるいは類似する語句表現が多く確認できる。例えば、加藤版において、「一九四一年十二月六日」に開かれた「軍事会議」で「原子力を戦争に使用すること」が「決定した」（5章）という表現があり、安部版でも「一九四一年十二月六日」に「ついに原子爆弾の使用」が「決定し」た（3章）という類似した表現が見られる。他の共通する語句については、表三に示した。

表三 加藤版と安部版に共通する語句とその章番号

共通する語句		加藤版	安部版
「核分裂を実現した」		1	1
「そして」「コバルト色の日本の空から、二つの原子爆弾を、二つの町に投下した」		1	1
「武器の歴史は」「棍棒から始まります」		2	2
「恐怖」		3	2
「不安」		3	2
「一九四五年」「五千五百万人もの人々が死にました」		2	2
「V1号、V2号」		2	3

「沖繩」で「出撃命令を待っていた」一台の爆撃機「エノラ・ゲイ」	5	3
「原子爆弾を抱きかかえ」	5	3
「広島へ」	5	3
「長崎」	5	3
「冷たい戦争」	7	6
「防衛」	8	7
「ビキニで」「実験」された「水爆」は「広島の原爆の八百倍の力」	11	7
「ストロンチウム九〇」	10・11・12	7
「ガン」	11	8
「奇型児」	11	8
「ビキニ」	12	8
「漁夫」	12	8
「西独」	13・16・21	8
「十八人」	13・16	8
「科学者」	21・13・16・22	8
「ゲッチングン」	13・21・22	8
「ゲッチングン宣言」	16・21	8

仮に、両作に共通する語句が「恐怖」や「不安」、「長崎」といった二字熟語のみであるなら、安部版が加藤版を下敷きにしたという断定は避けるべきだろう。ただ、原作から直接訳出した場合には異なった邦訳となる可能性のある表現、例えば、「コバルト色の日本の空から」

「二つの」「原子爆弾を」「投下した」（加藤版、安部版ともに1）という表現が同一であったり、「ビキニで」の「水爆」「実験」は「広島の原爆の八百倍の力」（加藤版11、安部版7）という表現の数値も同一⁽²⁶⁾であったりする点を踏まえたとき、安部が加藤版に目を通していた可能性は少なからずあるだろう⁽²⁷⁾。

次に、脚本から確認できる内容の変更点・相違点を挙げる。まずは、前掲書『安部公房の演劇』『4演劇の総合化』『最後の武器』で指摘されている変更点を確認しておきたい。高橋は大別して三つの変更点を挙げている。一つ目が、「科白やシユプレヒコールの構成と内容」である。加藤版において、「報告する人」が、「広島に原爆が投下された状況」を報告するのに対して、安部版では「子供による作文の朗読」で「状況が伝えられる」点。二つ目が、加藤版で「ビキニ環礁の水爆実験の悲惨さ、今後の核戦争の恐怖を訴え、「抗議」「要求」「理性の賛美歌」「フィナーレ」という構成になっていた」たのが、安部版では「この構成が廃止され」「登場人物たちの会話をとおして戦争の残酷さが暴かれていく」という構成に関するもの。三つ目が、安部版には「安保条約という日本独自の問題も盛りこまれ、現在の危機にも目が向けられている」点である。

他に見られる変更点・相違点として、三——で確認したとおり、安部版の配役が原作や加藤版よりも増やされ、また、それぞれの属性も細分化されている点がある。具体的には、「ソロバンをかつぎ」「支配者たちに、科学者たちを指さし」「ポーナスをはず」むように言う「紳士」が配役として追加された他、「兵士たちとその指揮官」が追加され、

「空襲」で逃げのびた「支配者たち」とは異なり、「指揮官をふくめた兵士たち」も命を落とす筋書きが追加された点が挙げられる。また、加藤版で「原水爆を使用する人」とあった配役が、安部版で「支配者」に変更されている他、「被爆者は、民衆の一部」との設定も新たに付け加えられていたり、〈劇中で登場人物が殺傷される場面〉や、〈戦争に関する「責任者」を探す場面〉が追加されていたりすることなども変更点として挙げられる。これらは人物が増やされたことに関する変更点であるが、反対に減らされた箇所もある。例えば、列挙される人物名がそれに該当する。加藤版、安部版いずれにも実在の個人名が挙げられているが、加藤版で列挙される人物が「原水爆をつくる」二十九人であるのに対し、安部版で言及される八人はいずれも、原水爆に関わったために、親族や本人が死を辿ることになった人物であるという点で異なる。例えば、「被爆者」の一人、久保山愛吉は、第五福竜丸に無線長として乗船していた「昭和29年3月1日」、「ビキニ海域において」「時に小雨交りの放射能灰を約4時間に亘って被り」「2週間の後3月14日母港焼津に」戻ってきた後、「国立東一病院」に入院していたが病状は回復せず、「9月23日」⁽²⁸⁾に亡くなった人物である。安部版「8 どちらが無知か？」では、久保山の死をきっかけに「原水爆禁止署名運動全国協議会」が立ち上げられ、「第一回原水爆禁止世界大会」が行われた後、「第二回」「第三回第四回世界大会」と回を重ねてきたことが語られている。

また、高橋の指摘にある「子供による作文の朗読」で「状況が伝えられる」という箇所については、調査の結果、本文に挿入された詩五

編すべて、峠三吉編『詩集 原子雲の下より』（昭和二十七年九月、青木書店『青木文庫62』原爆の詩編纂委員会編）に収録されていること⁽²⁹⁾が判明した。編者である峠の序文によると、「『原爆の詩編纂委員会』はこの詩集の中に、広島の子供たちの原爆の事実⁽³⁰⁾に立脚した、何者にも歪まされない卒直な叫びを中心に、戦後七年、生活のすみずみにまで滲透した原爆の悲劇の中から立ち上る市民の、平和への願いを盛るべく、五月二八日、広島の各文学団体に所属する（新日本文学会広島支部、人民文学広島友の会、われらの詩の会、広島文学協会、エスポワール文化サークル、広島大学、詩グループ等）メンバーにより結成され、編集顧問を設けて直ちに活動に入った。／詩の蒐集は、『日本平和憲法の行方』さえ案ぜられるとき……原爆の真の姿を訴え……平和のために役立てる」という趣旨によって一カ月の期間にわたってなされた」という。安部は、実際の被害者である人物の名前や詩を戯曲内に挿入することにより、現実性を持たせる効果を期待したものと推察される。

安部版で言及される残り二人は、「50年ソ連に原子力機密を売ったスパイとして」⁽³¹⁾逮捕され、死刑となったローゼンバーグ夫妻である（「6 ローゼンバーグ」）。夫妻は作中、アメリカを批判した人物がスパイとして捕えられる経緯が示された後で紹介される。すなわち、「語り手」の、「唯一の原爆所有国だったアメリカ」は「国際緊張を自分に有利なほうに導こうとした」という話を承けた「民衆」が、「なぜそれが戦争準備でないのか私たちには分らない」と言ったがために、「支配者」の指示を受けた「兵士たち」によって「スパイ」として「タ

イホさ」れたのに続き、「語り手」が「こうして、ローゼンバーク夫妻は殺されました」と話す場面で紹介される。

安部が戯曲を初めて手がけたのは昭和三十年三月の「制服」であり、この時期、積極的に戯曲に触れていたものと推察されるが、その一つとして、ローゼンバーク夫妻関連の戯曲について言及している文章がある。例えば、次の引用は、戯曲「愛は死をこえて」⁽³¹⁾（演出・松尾哲次、上演劇団民藝）に関する所感⁽³²⁾である。なお、文中の「グリーングラス」とは、「ジュリアス」の妻「エセル」の「弟」⁽³³⁾である。

ローゼンバーク夫妻が死刑になる前の六時間を、独房内の二人を中心に、六場にえがいた作品である。「略」房内は、平凡な二人の男女と、平凡な一つの機械とで、まるで錬金術師の実験室のようなグロテスクな緊張の中におかれる。しかし人間の魂というのは、かならずしも錬金術師の思惑どおりにはいかないものだ。二人は死を選び、彼らは二人の魂を手に入れることができずにしまふ……というのがこの芝居の筋。／「略」／舞台もかなり作品の要求にこたえた出来ばえだった。この芝居は、ひじょうにすぐれていると同時に、おそろしくむつかしいものだ。山内明のグリーングラスがやや類型的（意図は充分理解できるのだが、説明が多すぎるのではなからうか）に思われたほか、演技も即物的でよく乾いており、作者の計算をよく解きこなしていた。

ローゼンバーク夫妻の有罪・無罪の「唯一の決め手」となったのは、「グリーングラス」による「自供」⁽³⁴⁾であり、「終始無罪を主張」していた夫妻に対し、「世界的な助命運動が起き」⁽³⁵⁾、世間を賑わせて

いた。安部が翻案の際に夫妻を追加したのも、世論と同様、彼らが救済されるべき存在であるという意識が安部にあったためではないだろうか。

四 むすびにかえて

以上のように、詩五編（前掲『詩集 原子雲の下より』）の挿入、詳細なデータ（第五福竜丸事件、ストックホルム・アピール）の提示、また、実在の人物（久保山愛吉、ローゼンバーク夫妻）の列挙などを通して、安部は劇に現実味を持たせること、また、戦争や核実験が過去のものではなく、現在進行形の問題であることを劇中で示そうとした可能性について考えてきた。脚本の方針には、それと同時に、本作の上演場所が日本であったことも影響していたと考えられる。例えば、原作が上演された西ドイツ（当時）は「ゲッチンゲン宣言」が採択された場所である一方、日本は原爆の被害を直接に受けたという意識が働いたといえる。加藤版で見られるヨーロッパの地名が安部版で省略されていることも含め、安部版で加えられた内容の多くが日本に関する問題であったり、新聞でも確認できる問題であったりするのは、劇の聴衆の大半である日本人が、身近な話題として認識・共感しやすいためであろう。また、両作に共通する語句表現もいくつか見られるが、「ゲッチンゲン」や「ゲッチンゲン宣言」が安部版でも取り上げられているのも、本作上演の前年に採択されたこの宣言の意味を示すためであろう。

さらに、加藤版では紹介されたものの、安部版で削除された人物がいるが、ここには安部の、科学者の戦争責任に対する意識が働いたものと考えられる。その背景を、原子物理学者オッペンハイマーについての発言記録から探ってみよう。次の文章は、「水爆と人間―思想のたたかい」（昭和二十九年十月『文学の友』）と題された随筆である。

水爆はみなごろし兵器です。ドイツが戦争中に、爆撃によってうけた被害全体は、日本におとされた原爆の破壊力で換算すると、ちょうどその三百発分だということです。原爆の千倍のエネルギーをもつといわれる水爆の破壊力は、まさに想像を絶したものだといわなければなりません。この機械的破壊力の上に、さらに放射能による被害が加わるのだから、この千発の原爆に細菌爆弾をつけたようなものだと考えるべきでしょう。／〔略〕／

水爆の恐怖は、いくら声を大きくしても、大きくしすぎたということはないでしょう。しかしさらに、オッペンハイマーが「驚愕」と恐怖は爆弾の物理的破壊にとらず、軍事的機能の一部である」といつているとおり、その心理的被害もまた大きく問題にしなければならぬと思うのです。アメリカの諜報戦争の専門家であるラインバーガーという人も、「超破壊兵器を一国以上が持つにいたるや、慢性的心理戦争の段階に入る」と言っています。繰返された原水爆実験には、あきらかにそうした心理戦争の要素を見出すことができるのです。（傍点は原文ママ）

右の箇所は次の文章を参照したと考えられる。ラインバーガー著、須磨彌吉郎訳『心理戦争』十四 心理戦争への準備と心理的武装解除

（昭和二十八年六月、みすず書房）の一節である。

最も卓越した科学者の一人は驚愕と恐怖とを爆弾の物理的破壊に劣らず軍事的機能の一部であると看している（註2）。新兵器の存在のみにて未来戦の可能性を殆ど識別しえないまでに変えてしまった。しかし今でも納得のいくようにみえる若干の仮定がある。

／超破壊の兵器を一国以上が持つに至るや否や、心理戦争の準備段階は略々慢性状態に入ると推察される。／〔略〕／註（2）バーナード・プロディー（編）『絶対兵器―原子力と世界秩序』（一九四六年、ニューヨーク版）に引用されているJ・R・オペンハイマーの言参照。この書は一般に認められている卓越した常識を備えた権威による、原子爆弾出現の観点からみた戦争及び国際関係の性格を論じたものである。

オッペンハイマー（Oppenheimer, John Robert [1904～1967]）とは、「アメリカの理論物理学者」で「Harvard 大学卒業後 Cambridge 及び Göttingen 大学に学び California 大学及び California 工科大学の物理学教授」を務め、「理論物理学」に「多くの業績がある」³⁶人物である。また、ロバート・オッペンハイマー著、美作太郎・矢島敬二共訳『原子力は誰のものか』（昭和三十二年五月、中央公論社）の著者紹介によれば、「原子物理学者」であり、「戦時中ロス・アラモス研究所長として原爆製造に成功」したが、「1954年6月その交友関係より機密保持上不適任であるとして米国原子力委員会より追放」されたとある。加藤版で「原水爆をつくる人」として挙げられていた人名は、安部版ですべて削除されているが、それは、「科学者」たちはあくまで「平和

を信じて、武器の発達に協力した」「(8どちらが無知か?)」に過ぎず、かつ、彼らもまた「支配者たちの」言動に対して「ためらいながら、恐れながら」「研究をつづける」(3 最後の武器) 存在であることを示唆しつつ、戦争責任の所在を科学者から遠ざけるためだったのだろうか。

安部は、『Göttinger Kantate』の翻訳版の上演ではなく、翻案劇「最後の武器」として上演することを選んだ。関根弘は本作に対する評価として、次のように好意的な態度を示す。「討論を立体的に」(昭和三十三年九月一日『原水爆禁止ニュース』三面)の一節である。

安部公房翻案、千田是也演出のシブレヒ・コール「最後の武器」(『現代詩』九月号連載)は原水爆禁止世界大会の最後を飾るにふさわしい催しだったと思う。百万言を費すよりもはるかに具体的な原水爆禁止の要求がそこに打ち出されており、感動の波が日比谷野外音楽堂の大観衆のなかに脈打っていた。近頃ない感激であり、演劇史上にも残るものであろう。

安部自身、この作品に手応えを感じていたようであり、上演の一年後に発表した評論³⁷⁾には、次のような発言が確認できる。

翻案というものは面白い。作品と現実の関係、言いかえれば何があるのかを現実的たらしめているかが、実によく分る。もしかすると、翻案などというものはもともと意味のないもので、するとすればやはり完全な改作まで行かなければ駄目なのかもしれない。

本稿では、「最後の武器」は安部が自身の創作意図を反映させた作

品であるとの立場をとったが、脚本執筆の過程で演出家・千田是也との協議があったたろうことは想像に難くない。本作上演後、安部と千田は野間宏らと共に〈三々会〉という会合を始める。『毎日新聞』の記事「新劇運動の課題」三々会、現代に即したドラマを 作家と劇団人の協力作業(昭和三十四年六月一日付朝刊十三版十面)によれば、「この起こりは、安部」の「どれい狩り」に始まり次作「幽霊はここにいる」を演出した千田が野間宏の「黄金の夜明け」を演出するに及んで、安部と野間とが「千田演出の理論と実践に共鳴」し、一方の千田も「新作戯曲の成功から改めて現代劇の創造に意欲をかきため」られたことをうけ、「もつと現代と結びついたドラマを作ろう」とのスローガンのもと、「三々会」が立ち上げられたという。「俳優座を中心に展開され」(同)ることを意図して結成された当会の構成員は、昭和三十四年六月時点で、「前記三氏」および「椎名麟三、堀田善衛、田中千禾夫、佐々木基一、花田清輝」、「遠藤周作、木下順二」(同)の十名。鳥羽耕史は、『運動体・安部公房』(平成十九年五月、一葉社)所収「第一部 運動体の中での安部公房 第三章〈記録〉と運動体の拡散」の中で、安部が「最後の武器」を当時参加していた〈記録芸術の会〉(昭和三十一年結成)の「会員同士との共同制作」の出发点に位置づけていたと指摘するが、〈三々会〉結成への布石という意味合いがあったとも考えられるのではないだろうか。

注

- (1) Weisenborn, Günther (1902～1969)。日外アソシエーツ編集部『20世紀西洋人名事典 2. ハーワ』(平成七年二月、日外アソシエーツ)によれば、「フェルベルト生まれ」の「小説家」で一九二八年に反戦劇でデビューするが三十三年「以後ナチスにより発禁処分を受け」る。その後「ニューヨークで新聞記者」を経験し帰国。「反ナチス抵抗運動に加わ」ったことがきっかけで四十二年逮捕、「敗戦まで獄中」で過ごした。五十一年「以降ハンブルク小劇場主任演劇顧問」を務めた人物である。
- (2) 初演について加藤衛訳「世界に警告する」(昭和三十三年九月『悲劇喜劇』第十二巻第九号)によれば、「去る(一九五八年)五月十八日、西独シュトゥットガルトで、社会民主党々大会開会の当日三百人の内外記者を前にして、ピスカートル演出により」行われた。「核兵器の所有をめぐって政府・野党が激しいたたかいを展開している西ドイツでは、それは意味深い催しであつた」という。
- (3) 『安部公房の演劇』(平成十九年四月、水声社)所収「4演劇の総合化『最後の武器』」。
- (4) 『安部公房全集009』(平成十年四月、新潮社)解題「作品ノート9」。
- (5) 朝刊十四版の三面及び七面に、十二件の記事が掲載されている。『朝日新聞』では、同日の朝刊三版三面に二件、翌日三月十七日付朝刊十二版三面及び七面に十七件、それぞれ掲載されている。
- (6) 道場親信「占領と平和(戦後)」という経験「Ⅱ「反戦平和」の戦後経験―対話と交流のためのノート」第三章「平和共存」と「革新」の時代(一九五三～一九六四年)」(平成十七年四月、青土社)。
- (7) 吉川勇一「せめぎ合う「連続」と「断絶」―反戦平和の意味をめぐって―」(吉川勇一編『コメンタール戦後50年④ 反戦平和の思想と運動』[平成七年七月、社会評論社]解説)。
- (8) 小林徹編『原水爆禁止運動資料集第五巻(第二期・全三巻)』『原水爆禁止運動資料集第二期(一九五八～六〇)解説』(平成八年二月、緑蔭書房)。
- (9) 注8に同じ。
- (10) 注8に同じ。
- (11) 『原水爆禁止運動の成立 戦後日本平和運動の原像1954―1955』(平成三年八月、明治学院国際平和研究所)。
- (12) 昭和三十三年三月には、原水爆禁止決議案が参議院本会議で可決している。
- (13) 「水爆のツラに道徳説法」(初出不明。初刊は『猛獣の心に計算器の手を』[昭和三十三年十二月、平凡社]。
- (14) 日外アソシエーツ編集部『新訂増補 人物レファレンス事典 昭和(戦後)・平成編 あくす』(平成十五年六月、日外アソシエーツ)。
- (15) 例えば、『Zwei Engel steigen aus』の邦訳(邦題「天使が二人天降る」)[現代海外戯曲11 昭和三十一年、白水社所収]など。
- (16) 高津一郎「人間信頼への確信「世界に警告する」に参加して」(昭和三十三年九月十日『よこはま演劇』第四十九号、一面)。「よこはま演劇」は横浜演劇研究所報。編集兼発行人・加藤衛、題字・千田是也。
- (17) 加藤衛「千田さんの微笑」(昭和五十八年二月『悲劇喜劇』第三十六巻第二号)。
- (18) 一方、加藤は「Göttinger Komödie」の邦訳を「世界に警告する シュプレヒヒコール ―ゲッティンゲン・カンターター」と題し、昭和三十三年九月九日、「原水協神奈川県、横浜市支部主催のもと」「地区労、市内各劇団、うたごえサークル協議会等」(昭和三十三年八月十日『よこはま演劇』第四十八号、五面)が協力した合同公演(於 神奈川県立音楽堂、演出・加藤衛)として初演した。
- (19) 昭和三十三年八月十日、第四十八号、五面。
- (20) 谷真介編『安部公房評伝年譜』Ⅱ 演劇・映画・放送作品目録 演劇

上演目録（平成十四年七月、新泉社）。

(21) 速記者不明、無題。

(22) 千田是也『どれい狩り』演出雑感（安部公房『どれい狩り・快速船・制服 安部公房創作劇集』昭和三十年九月、青木書店）、『千田是也演劇論集第3巻』昭和六十年八月、未來社）所収。

(23) 『撮影所に飛びこんで』（昭和三十三年八月『芸術新潮』）。

(24) なお、『世界に警告する』に参加した劇団の一つ、〈葡萄座〉に所属していた梨地四郎は、「もう一つ訴える力を——『世界に警告する』を観て」（前掲『よこはま演劇』第四十九号、五面）の中で、「合唱」は「人員の不足からテープとナマの合唱をつけあわせてやった」と記している。

(25) 加藤衛「二つの仕事を終って 第二回現代世界演劇展 「世界に警告する」上演」（前掲『よこはま演劇』第四十九号、五面）。

(26) ただし、加藤版で「八百倍」とあった表記は、安部版では「八〇〇倍」である。

(27) 安部がドイツ語を解さず、それゆえ原作に拠ることができなかったのではないかという見方もあるだろうが、安部は高校時代を「理科乙類（ドイツ語）で過ごし」、「ドイツ語を学」（前掲『安部公房評伝年譜』）んでおり、一定程度の知識は備えていたと推測される。

(28) 三好和夫、熊取敏之「ビキニ放射能症の臨床並に血液学的観察」（昭和三十年十月『日本血液学会雑誌』第18巻第5号）。

(29) 掲出頁は以下のとおり。松島愛子「げんばく」四十一頁、金本湯水子「ピカドン」二十六頁、坂本はつみ「げんしばくだん」二十八頁、山口英雄「無題」九十六頁、原田治「無題」百二十二頁。

(30) 前掲『20世紀西洋人名事典 2. ハーワ』。

(31) 『婦人公論』（昭和二十九年九月）に台本「ローゼンバーク夫妻 最後の六時間」が掲載されており、訳者の鈴木力衛による説明が付されている。それによれば、本作は「ローゼンバーク夫妻」をめぐる「政治的・人

間的な内容を」「最後の数時間にレンズの焦点を合わせて描こうと努めた」作品だという。

(32) 「レオン・クルッコフスキイ作「愛は死をこえて」」（昭和三十年十二月『芸術新潮』）。

(33) 注32に同じ。

(34) 注32に同じ。

(35) 注30に同じ。

(36) オッペンハイマー編、岡本彰祐訳者代表『科学50年史—20世紀の科学—』（昭和三十年六月、みすず書房）。

(37) 「演出家の錯覚—新劇の運命3」（昭和三十四年九月『芸術新潮』）。

〈付記〉

安部作品及び発言の引用は『安部公房全集』（全三十巻、平成九年七月〜平成二十一年三月、新潮社）に、千田是也の発言については『千田是也演劇論集』（全九巻、昭和五十五年七月〜平成八年七月、未來社）に、それぞれ拠った。その他の引用は、特記したものを除いて初出に拠り、漢字は通行の字体を用い、ルビを適宜略した。（「」内の注記及び傍線は佐々木により、改行は「」で示した。

なお、本稿は、第一回日本学ハイエンドフォーラム国際シンポジウム（二〇一三年十月十九日、於 山東師範大学）での報告「安部公房の『最後の武器』をめぐる翻案態度」をもとに加筆・修正したものである。会場内外でご教示くださった諸先生方に厚くお礼申し上げます。また、本稿執筆にあたり、神奈川県立青少年センター演劇資料室（運営…神奈川県演劇連盟）の皆様には格別のご配慮を頂戴した。記して感謝申し上げます。

